

〈 2. 特集 行く・読む 〉

台湾の路上から

——日常と統計の交差点——

仲 修平

「外食」という言葉を通して何を思い浮かべるだろうか？ 広辞苑によれば、「外食」とは「家庭外でする食事」とある。日本に住む多くの人は、「外食」と言っても居酒屋やレストランといった「屋内」で食事することを想像するかもしれない。写真1を見てほしい。この写真は、台湾の台北市で撮影した日常の一コマである。人々が歩道の上にテーブルを並べて文字通り「外で食べる」様子を映している。写真1の左下には、従業員の男性が麺類を茹でており、釜から湯気が立っているのが見て取れる。店舗の傍を歩くと、麺とスープのにおいが混じり合って食欲をそそられる。このようなスタイルで食事をする風景は台北ではごく一般的に見られる。本稿では、台湾の路上を歩くこと通じて見えてきた台湾社会の一端を考察してみたい¹。



写真1 台北市の路上にある飲食店



写真2 移動型の販売

本稿の対象となる路上は、台湾国鉄の台北駅南側から西門町と呼ばれるエリアである。この周辺は台湾の交通や政治の重要拠点であると同時に、観光客、現地の学生や働く人々が行き交う台湾の中心的な場所でもある。また、日常生活を支える食堂や雑貨屋などが所狭しと並んでいるのが特徴である。本稿では、店舗型・移動型を含めて小規模で事業を営んでいる人々を「自営業者」と呼びたい²。自営業者を研究対象とする私にとっては見るものすべて

¹ 本稿は、筆者が2014年12月9日から12月14日まで台湾に滞在していた期間の記録による。また本調査は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

² 自営業者の定義は慎重に検討する必要がある。本稿で想定する自営業者は1名から5名程度の事業規模である。ただし、定義については、制度的な条件（店舗設置の手続きや税制など）を考慮して精査していきたい。

が興味深いため、このエリアはまるで楽園のようである。

この地域でひときわ目を引いたのは、移動型の販売店（主に飲食系）が多いことである。写真2は、その典型である。販売方法は車輪のついた台に商品（このお店では、麺類とご飯類）を置いて売るというシンプルなものである。女性の販売者が多い印象であるが男性も同様に見かけられた。販売単価は商品によって異なるが、飲食系の商品は30 元から100 元（日本円で言えば400 円程度までの価格帯）が一般的であった。人々は朝・昼・晩を問わずこれらのお店（店舗あるいは移動販売）を利用しているようであった。

その瞬間は突然に訪れた。移動販売者たちが販売台を押しながら一斉に動き出したのである（写真3）。スクーターに乗った警察官たちが、移動販売をしている界限に入ってきたので、移動販売者たちはパトロールを避けるようにして退散しているのである。一時的な避難から戻ってきて販売を再開した場所は、驚いたことに交差点の真ん中である（写真4）。販売場所のすぐ後ろにはセブンイレブンとスターバックスがある。さらに写真をよく見ると、建物の2F 付近に備え付けられた2 台の監視カメラが、数分前まで右往左往していた移動販売者たちがいる交差点を捉えているのである。新しいもの（コンビニ・スタバ）と古いもの（移動販売）が交差するこの場所は、現代の台湾社会の一端を象徴しているように思えた。



写真3 避難する移動販売者たち



写真4 新旧が同居する交差点

自ら業を営むという点では日本にも存在する自営業であるが、それが日常に置かれた状況は日本とは大きく異なる。もちろん、自営業を取り巻く制度的な条件（例えば、路上での出店に関する規制など）が日本と違うことが背景にはあるだろう。しかし、制度面だけではなく、人々が自営業者に対してもつ日常的な感覚も異なると思われる。交差点で人々の流れを2 時間ほど観察していたが、少なくともその間にコンビニ・スタバの店員と移動販売者が揉めることはなかった（日本であれば、店舗の前で別のお店が販売していれば、制度云々の前に揉め事が生じそうであるが……）。つまり、移動販売者たちは制度的にも日常的にも許容されているのである。

最後に、路上で観察したことをもう少し膨らませて考えてみたいことがある。それは、写

真で見てきたような「日常に埋め込まれた自営業」と「統計データに現れる自営業」との関係である。路上で出会った自営業者たちは、統計調査では測定しづらい。彼ら／彼女らは物理的に移動しているので、データを集めるためにその数をカウントすることの難しさが常につきまとう。台湾の統計調査では、これらの対象を正確に集計することが困難であるという点で「インフォーマル」な領域で仕事をする人々と言えよう。本稿の対象は、台湾の中でも中心的な台北駅近辺のごくごく限られたエリアである。しかし、その背後にある無数の路上には、このような自営業者たちが現実として数多く存在していることが予想される。しかも、単に存在しているだけではなく、台湾の労働市場においては重要な役割を担っていると考えられる。日常と統計の狭間にある台湾の自営業者たちのリアリティをいかにして描くことができるのか。両者を結びつける「何か」が交差点にあるように思えた。